「ママ、ここがレコーディング・スタジオだよ。ガラス張りの向うに小さな部屋があるでしょ、あたしはあそこで歌うんだ」

「はぁー。キッタン、すごいねぇ。こんな所で歌うの?」

４月、六本木セディックスタジオ。この日、YUKIはスタッフやメンバーの許しを得て、函館から東京へ遊びに来ていた叔母と従姉妹たちをスタジオへ招いていた。レコーディングに集中するため外部をシャット・アウトするアーティストは多いが、YUKIたちは違っていた。むしろギャラリーがいたほうが気分が高揚して盛り上がる。

ママと呼んで慕っている叔母さんと、幼いころから仲良しの従姉妹のナータンとミカ。３人は緊張した面持ちでスタジオのソファに腰かけると、YUKIの立ち振る舞いすべてに目を輝かせている。

「ナータン、ミカ、見ててね! 今から歌うから聴いてて!」

スピーカーから「BABY ”Q”」のオケが流れる。すでにボーカル・ダビングは終了し、今日はコーラス部分を録るだけだ。ところが。

「YUKIちゃん、今の英語のところ、もう１回やってみよう」

何度歌ってもうまくいかない。こんなことは初めてだ。

デビュー・アルバムのレコーディングだというのに、ここまでのYUKIはいつも驚くほど速く、OKテイクを録っていた。

(なんでだー!? ママ、ナータン、ミカ、ごめんよぉ)

どれだけテイクを録っただろうか、ようやくレコーディングを終えて３人のそばへ行くと、ナータンとミカは安心したのか、今にも泣きそうな顔をしている。姪の頑張りに、感心したようにママがねぎらう。

「キッタン、レコーディングって本当に大変なんだねぇ」

「う、うーん……そうだねえ、ママ……(恥ずかしいぃぃぃ!)」

そう、ママの言う通り、1stアルバムのレコーディングは本当に大変だった。

新宿ロフトでのライブ後、1stアルバムのレコーディングの準備のために、YUKIたちはすぐに山中湖で合宿を行った。

楽曲のデモ・テープなら、インディーズ時代から演っていた作品を含めすでにアルバム１枚作るに十分だったが、実際にそれをレコーディングするとなると話はべつだ。サウンド・アレンジも決まっていないし、YUKIは歌詞を詰めなくてはならなかった。何より、バンドの音を固めると同時に、バンドとして固まる必要があった。

この時点での五十嵐は、いちメンバーというよりもサポート・ミュージシャン的な意識が強く、バンドを客観視していた。

TAKUYAにいたっては、つい数週間前に加入したばかりである。

「よし、じゃあ、みんなで飲むか」

(ヤ、ヤマナカさん、今日も飲むの? マジで~?)

毎晩リハーサルが終わると同時に、ディレクターの山中幸夫がみんなにそう声をかける。

みんなで酒を飲み、話す。交流を持つ。お互いのことを知り合う。

大切なのはそういうことなんだと、始まったばかりのこのバンドに山中は熱く語った。彼が抱いているバンドへの熱意は、恩田やYUKIが抱いているそれと同様だった。

合宿中は、飲んで飲んで、毎晩みんなして酔っぱらいになった。

そして昼間は、とにかくみんなで音を鳴らす。YUKIも一緒に歌った。たとえ詞が未完成であろうと、机の前であれこれ考えるより音に合わせて歌っているほうが断然言葉をキャッチできる。メロディに符合した、それも自分のイメージにいちばんふさわしい言葉を。

(このメロディにこんな言葉をのせて、こんなふうに歌いたい)

(こんなバンドでこういうふうにシーンに出ていくのがカッコイイ)

この、とか、こんなふうに、とかは、YUKIにしかわからない彼女のなかのイメージ。YUKIは自分の頭のなかにあるイメージに憧れていた。

それが作詞するうえでも歌ううえでも、YUKIの思考や行動のすべてを支配していた。彼女には、イメージこそが絶対だった。

「DAYDREAM」のように心のままに言葉を綴った歌もあるが、1stアルバムの歌詞のほとんどはYUKIのイメージで世界が完結している。

「歌詞には自分のホント成分/ウソ成分/バンドの魔法の成分と３種類のものが混じってる。その比重がちょっとずつ違うだけで、プロとしてやっている以上は裸のままの歌詞は絶対にありえない」——というようなことを自覚するのはこれから数年経ったあとのことで、２１オになったばかりのYUKIはイメージに憧れ、それに先導されながら、無自覚で詞を綴っていた。

ただひとつ、とことん曲を聴き込みその世界を自分の体の内に取り入れて言葉を紡ぐというやり方だけは、今も変わっていない。

飲んで話した山中湖での合宿を終え、都内のこのスタジオへ入っても、やはり飲んで話してまた飲んでとスタジオ・ワークは続いていた。

ある夜更けになどは入る店もなくなり、それでもまだまだ帰る気になれず、酒だけ買って駐車場で飲んだこともある。

六本木のはずれにある小さな駐車場、みんなしてコンクリートの上に座り込み、東の空が明るくなるまで飲んだ。どうしてあんなにしゃべることがあったんだろう? と思うほど、話は尽きなかった。

加入したころはYUKIと目すら合わせようとしなかったTAKUYAとも、少しずつ親しくなった。恩田だけでなく、五十嵐やTAKUYAにまで、恋の相談をしてしまうほど、YUKIはメンバーに打ち解けていった。

けれども、ほかのどんなことよりうれしかったのは、五十嵐とTAKUYAが初めて自分の歌を褒めてくれたことだ。

「いい。いいじゃん、この歌、すごくいいよ」

YUKIが「POWER OF LOVE」を録り終えるや、ふたりはそう言って彼女をコンソール・ルームに迎え入れた。YUKIはうれしかった。バンドのボーカリストとして、少しでも認められたような気がしたからだ。

初めてインディーズ盤を作ったときから、YUKIはこのレコーディング・スタジオのブースという空間が大の苦手だった。マイクの前に立っていると、ただそれだけでわけもなく緊張する。喉が詰まる。

(リラックスしよう。もう、ここを自分の部屋みたいにしちゃおう)

スタジオは、ミキサー卓のあるコンソール・ルームと、ドラムやアンプなどをセットする部屋、そしてボーカルを録るスペースとに分かれている。YUKIはまず、普段ドラムがセットしてあるスペースにソファを置き、その脇の小さなテーブルにちょっとした飲み物を置いて、そこをみんなの休憩所にしようと考えた。

「"Bar YUKI”へようこそ!」

録るを終えた五十嵐や恩田がソファにくつろいでお茶を飲み、音の上がりについて話をしたりと、”Bar YUKI”はなかなか好評だ。

そして肝心のボーカル録りをするスペースには、YUKIは壁のそこら中に好きな写真や自分が描いたイラストを貼り詰めた。

(とにかく居心地のいいように……!)

かくしてボーカル・ダビングは順調に進んだ。なかなかOKが出なかったのは、ママやミカ、ナータンが遊びに来てくれたあのときと、「あいたくて」の歌をもう一度録ろうと言われ、苦心したときぐらいだ。

ミキサー卓のあるコンソール・ルームの壁には、YUKIの描いたメンバーの似顔絵と一緒に、次々に完成していく歌詞が貼られていった。

あるとき、それを目にしたプロデューサーの成瀬がこう訊いてきた。

「この詞、YUKIちゃんが全部書いたの?」

「はい。そうですけど」

「ふーん。……うん、大丈夫だ。大丈夫だね」

(なんだろ、大丈夫って。……OKが出たって思っていいのカナ?)

YUKIは、根拠のない自信だけがあたしのパワーだ、と秘かに思っていた。気は強いし生意気だし態度はでかいが、その反面、脆くて臆病で周囲の反応や気持ちを過剰に気にする女の子でもある。

自信なんて、まるでない。でも、だから頑張る——YUKIの思考はいたってシンプルだった。いや、迷いや戸惑いなら毎日山ほど降りかかってくるのである、シンプルにいかなきゃあ、先には進めない。

「おはようございまーす」

元気よくスタジオへ入ると、”Bar YUKI”のソファの上で恩田が眠りこけている。TAKUYAもディレクターの山中もエンジニア・スタッフも、スタジオのそこここで仮眠をとっている。

(昨夜もまた、みんなスタジオに泊まったんだ……)

しばらくギターを弾いていなかったTAKUYAは、山中の事細かなチェックを受けながら、ひたすらギター・ダビングを続けている。恩田はその日録り終わった音のチェックに、毎回ひと晩を費やしていた。

レコーディングは佳境に入っていた。もうすぐアルバムが完成する。

「あ、俺、これ食べたい」

「いいねえ。これ」

スタジオでいつも楽しみにしていた出前タイム。中華を食べようと開いたメニューに載っていたのは、9500円のフカヒレスープだ。

「よし、じゃあこのアルバムが50万枚セールスしたら、これをみんなにご馳走するよ」

「やった!」「マジで~?」「絶対だね!? ヤマナカさん!」

YUKIたち４人が、麻布登龍のフカヒレスープに舌鼓を打つ日は、そう遠いことではなかった。